

# どれみなのはなし

## そのらく



もくじ

まえがき

ふるさとのさき	3
ちいさななやみ	18
あとがき	30

はじめまして、もしくは、おひさしぶりです。  
薄いながらも、6冊目のどれみ本です。

発行日が記念日になりましたので、いつもとはちょっと趣向を変えてみました。しばらく書いていなかった元老院魔女さま、初書きのリリカおばあちゃん、うまくしゃべってくれるとよいのですが。

あ、恥ずかしい慚も、いつも通りちゃんとなりますので、苦手な方は本を閉じたほうがいいですよ。

では、まいりましようか  
『どれみはなし』そのろく、敬老の日記念です。  
どうぞご覧くださいます。

酒処 金井亭亭主 猫好敬白

イラストレーション……久遠一海

## ふるさとのわね

セミの声がしなくなつて、もう半月くらいになるかしら。

海からの風も、うつかりすると冷たいくらい。ついでこの間まで残暑なんて言っていたのが、うそのようね。

お日さまも少し西の方に傾いてきたわ。さあ、ペンションの入り口にお休みの札をかけて、中に入りましょうか。

きょうの夜には、おおきな笑つお月さまが昇ってくるはずね。

いつも部屋の隅に用意して、ほうきに小さな旅行かばん。一泊だから、中身はそんなに要らないわね。あちら、ほうしはどこに置いたかしら？

ああ、そうね。お洋服は魔法で出せばいいのだった。

たわ。

ええと、魔法で出せない忘れ物は、あ、そうそう、机の上のがき。これを忘れちゃいけないわね。一週間前に届いたはがきは、楽しそうなパーティのお知らせ。受け取りの名前は『リリカおばあちゃん』。あの子たちに、また会いに行けるのは楽しみね。

\*\*\*\*\*

ギ、ギイイ

ずいぶん重いわねえ。やっぱり、使わないと錆びついちゃうのかしら？こんど直しておかないと。

そう考えながら、ドアの向こうに足を踏み入れると、ふわつと香りがやってくるわ。なつかしいふるさと、魔女界の匂いが。

「まだだいぶ時間があるわね。ちよつと、寄つていこうかしら？」

ハートやミラーは元気かしら？リードにはマジョ

リカちゃんがお世話になってるのだから、一度はご挨拶に行かないとね。あとは　そうそう、魔法博物館でスローンに会うのもいいわね。問屋にはドンがまだいるのかしら？

懐かしい顔が、ひとつひとつ浮かんでくるわ。みんな、このひろい空のどこかにいる。でも

「モンローはもういないのねえ」

口に出したら、寂しさが迫ってきた。そう、モンローだけじゃないわ。ジュリーやサリーも、もういない。だんだん、ひとりになってゆくのね。

わたしは、しばらくぶりの魔女界を歩いてみることにした。ほつきで飛んでいくなんで、なんだかもつたいないような気がしたから。

\*\*\*\*\*

「どうぞ　おお、マジヨリリカ！」

小さな病院の小さな診療室。勝手知ったるでノッ

クしてみると、昔と変わらない顔が驚きながらよるこんでいた。

「おひさしぶり、マジヨハート。元気にお仕事している？」

彼女は白衣の真ん中を、ぼん、とたたいて、

「私が高齢生しては、新しい母親たちに示しがつかないからね」

あいか変わらず、自信たっぷりだわ。よかった、昔のままです。

「そうね。あなたは立派に母親を育てているわ」

ハートは苦笑いしながら、わきの椅子を勧めてくれる。

「もつとも、今年は赤ん坊が少なくて、あたしは開店休業だけだね」

わたしがちよいと腰かけると、バラの絵柄のティーカップが、ポットと一緒にやってきた。

「看護婦のバイトも今年は取っていないし、ま、ひとりでのんびりやっているさ」

器用な手つきで、紅茶が注がれてる。懐かしいわねえ、ハートのローズティ。赤ちゃんが産まれたときにこぼれた花びらだけを集めた、ハートにしか作れないお茶だものね。

「あんたの方はどうしたんだい？ 魔女界へ戻る気にもなつたのかい？」

わたしが横に首を振つたら、ハートつたらとも困つた顔をしているわ。

「マジヨリカちゃんにお呼ばれしちゃつてねえ。時間が余つたから、ちよつと寄つただけなのよ」

手元のカップをじつと見つめてから、彼女は心配そうにわたしを見て、

「帰つてくれば、みんな歓迎するよ？」

ふふふ。心配性なところも変わつてないわね。

「ふるさとはいいわねえ 懐かしい匂い、懐かしい風景。そして、懐かしい顔 でもね」

ふう。それじゃ、心配を解いてあげましょか。

「でも、それだけ。新しいなにかがあるわけじゃな

いわ。

わたしはね、たとえずつと一人でも、なにかのある人間界で過ごしたいの。もちろん、人間とつきあうことができれば、ずつといいけれど。 ああ、モンローやマジヨリカちゃんが羨ましいわ!!」

ほんと、どれみちゃんやもちゃんや、みんなを育てることができたなら、どんなに素敵かしら。

「その言葉、昔の私なら笑つて済ましてただらうね。けど、今ならわかるよ。 ああ、なんだかマジヨ

ランに言われているようだね」

ハートつたら苦笑いしながら、ちよつと下を向いちゃつたわ。 あんまり思い出させるのも、悪い

かもしれないわね。それじゃ、あ、そうそう。

「ハート、今の魔女界に、おみやげ物のお店ってあるのかしら？」

「なに!？」

ああ、起きてくれたわ。

「いえね、何かのお祝いだそうだから、おみやげを

持っていきこうと思うのだけど。実はまだ選んでないのよ」

言い終わる前に、ハートが手近の缶を開けた。からっぽの缶に、ローズティをいっぱい詰め込んで、「あたしの贈り物と言えば、このくらいだね。あと　まあ、ちよつと声かけてみようか」

\*\*\*\*\*

ふよふよつと、なんとかほうきをあやつりながら飛んでいると、大きな大きな魔女ガエルの形が見えてきたわ。ハートの言うとおり、ここを見つければ上からのほうが楽ね。

さて、目標は魔女ガエル村の真ん中、のぼりが立っているところ。ずいぶんと懐かしいわあ、魔女ガエル村の集会所なんて。

降りようとしてほうきを下に向けたら、手から滑り落ちてそのまま飛んでいっちゃったわ。あらあら、

これじゃ落ちちやうわねえ。

そう思っていた私の体が、ふわつとなにかに包まれた。大きな大きな綿のかたまりに、背中から落ちていつてるんだわ。すっかり止まったところで、綿がぼんつ、と消えた。目の前に立っていたのは、ああ、いつまでも変わらない仮面の魔女だわ。

「マジヨハートから連絡があったから、用意しておいたのだが　あまりに予想通りの登場というのも何だな」

ぶすつ、とした声も変わってないわね。思わず頬がゆるんでしまうわ。

「ひさしぶりね、マジヨリード。うちのマジヨリカちゃんのお世話してくれて、ありがとうね」

でも、わたしの手をひいて起こしてくれる。

「礼を言われる理由がわからないが？」

そして、わたしの背中のほこりを払ってくれる、やつぱりぶすつ、て声のまままで、ね。

「私はマジヨガエルになってしまった魔女たちみな

7 ふるさとのさき

の居場所を作るのが役目だ。誰かを特に世話したりなどはしない」

そうして、集会場の方をちらつ、と見てる。そこには魔女ガエルさんたちがいて、みんなくつろいだり、笑ったり、なにか仕事をしてたりするわ。

「そうだったわね。でも、ありがとうね」

リードが軽くうなずいた。これが彼女の誇りね。

「マジヨリカたちのところへ行くのか？」

あら？珍しいわね。リードが人のことを気にするなんて。

「ええ。パーティにお呼ばれしているのよ」

「そうか。なら礼代わりと思って、これを持って行ってはくれぬか？」

懐から、紙の箱が出てきたわ。

「なあに、これ？」

「マジヨガエル村の新銘菓を考案したのでな。感想を聞かせて欲しい。できれば、モモコの声が聞きたいな」

モモコ？ええと

「あ、もちやんね。モンローが育てた子ね」

「そうだ。彼女ならば、正しい判断ができるだう」

まあまあ。リードがこんな人に人を褒めるなんて、昔なら考えられないわね。

思わずにこにこしていると、うるさそうにそっぽ向いてしまったわ。だけど、手は紙の箱を持ったまま、真っ直ぐわたしの前に出している。

「いい子に育っているのね、あの子。ひよつとしたら、モンローの2代目になるのかしら？」

そつと箱を取って、かばんの中にしまいながらそつ言ったら、リードは顔を上げて空を見つめたわ。

「いいや。彼女は2代目などではない。初代のモモコだ」

傷つきやすい分愛情が深いのはむかしからだけど、ここまではっきり言わせるなんてねえ。

やっぱり、わたしはモンローが羨ましいわ。

\*\*\*\*\*

魔女ガエル村から今度は歩いてずうつと奥へ。深い深い森は、上から見なくてもすぐにわかるわ。薄暗くて細い道。のんびり歩いていても誰にも会わない。昔はこんなじゃなかったのにねえ。

場所が同じなら、もうそろそろだけど ああ、あったわ。

小さなおうちのまわりに、手織りのカーペットやタペストリがいっぱい。それじゃ、昔のまんまでいつてみましょうか

「クロスうゝ、いるうゝ?」

できるだけ明るく、大きな声で。 んゝ、まだ足りないかしら?

「やつほあゝ、クウスうゝ」

少し声を高くしてみたら、目の前のドアがバンツ、と開いて、

「ええい! その気の抜けた声はやめんかッ!!」

はいはい。作戦成功

クロスしたら、わたしを見つけたとたんに、しわがのびるくらい目を見開いちゃってるわ。

「お前、マジヨリリカか!？」

わたしはかばんを置いて、ぴょん、っと首に抱きついた。

「懐かしいわあ、クロス。あれからもう何百年経ったのかしら?」

ぎゅっ、としがみついたけれど、

「ずいぶん、軽くなつたな」

応えは、無愛想な一言だけ。もう抱き返してはくれないのね。

「お互いさまでしょ?」

しかたないから、そう言って離れてあげた。そう、お互いもう、昔のままではいられないのよね。

「いつたい、いつ帰ってきたんだ?」

「帰ったわけじゃないわ。ちよつと寄り道しただけよ。帰るのなら、あなたに知らせないはずないじゃ



ない♡」

軽くウインクしたわたしを見て、クロスが口をぽかぁんと開けた。なにかしら、と思っただら

「きよ、今日来たのかい!? また上弦過ぎたばかりじゃないか。お前、また無理やりとびら開けたね!!」

あら? たしかきよは笑う満月の日じゃなかったかしら? たしか手帳にそう書いて あ。

「ああ、おとしと勘違いしてたわ。どうりで扉が重いはずね」

クロスが私の肩につかまって、がっくりうなだれてる。普通の魔女じゃ開かないだのぶつぶつ言ってるわ。やぁねえ。いつものことじゃない♡

「頼むから、この家のとなりにヘンなもの建てたりしないでくれよ」

あらら、予想済みなのねえ。魔女界に帰るときにはお隣さんになるうと思っていたのに。

「もういい。また人間界に戻るなら、そのひざ掛けでも持ってゆけ。冬は魔女界より寒い」

起き上がって、家に戻ろうとするクロスのかげを、

わたしはちよい、とつつまんだ。

「あなたも、わたしと一緒に来ない?」

「バカを言うな。私はここで機を織り続ける。そう決めたのだ」

わたしの手をこぶしで振り払った。痛いわね。

「それじゃ、どれみちゃんたちには、ちよくちよく来てくれるように言わないとね」

相手をこぶしで振り払う必要なんてないのよ。嫌なら『離して』って言えばそれで十分。

「人と触れあうのは、とても楽しいことよ」

「人間となら、先々代女王様のお孫様と十分触れあつたさ。眠りにつかれた今、もう触れあう気も、意味もない」

ぶつきらばつに言いながら、家の扉を閉めようとしている。けど『離して』って言わなかったわ。それなら まだ希望はあるわ。

「そう。それじゃ、もう少ししたらまた来るわね」

ゆっくり閉まってゆく扉が、途中で止まったわ。

「もうすぐあの子たちが、先々代女王様の目を覚まして差し上げるわ。そのときには　きっと人間界に連れてゆくわよ。クロス♡」

ふた呼吸くらいしてから、扉がぱたん、と閉まった。しかたないわね。わたしはちょっとだけ息をはいて、ひざ掛けを腕にかけた。

そのまま振り向いたわたしの耳に、小さなつぶやきが届いてきたわ。

「目覚めてくださるのなら　あたしはどこへだって、ついて行ってやるさ」

わたしは頬がほころぶのを感じながら、ゆっくり家の周りをながめてみた。

庭に干してある、色とりどりの織物。見てただけで、ふつと口からこぼれてくる。

「待ってなさい。あなたたちもそのうち、みんなの許へゆけますよ」

\*\*\*\*\*

シャラン　シャラン

クロスにいる森を抜けたら、あたりに聞き覚えのある音が響いてきたわ。これは、たしか

上を向いたら、ゆっくりと馬車が降りてくる。ああ、そうだわ。この音、女王様の馬車じゃない。

これを見るの、彼女が女王様になって以来だわね。「マジヨリリカ様でいらっしやいますか？」

当時のことを思い出していたら、御者をしている、まだ若い魔女さんが声をかけてきたわ。

「ええ、そうよ。女王様もいらっしやるの？」  
御者さんは左右に首を振ってる。なんだか、お人形さんのような動き方ね。

「私は近衛のマジヨリンと申します。女王様より、城へお連れするようにとのご命令を受けてまいりました」

「まあ、困ったわねえ」

マジヨリンさんが、げげんな顔でみてるわ。なんだか、むかしのハートを見ているみたい。うーん、どうやって説明しようかしら？

「いえね、女王様のとこ行くとき長くなっちゃうから、最後にしようと思ってたのよ。まだロクサーヌにもサリバンにも、まあ、バナラにさえ会ってないわ。いまじゃモンローの話ができるなんて、ももちゃんかバナラしかないんですもの。この機会を逃すわけにいかないでしょう？」

降りてきた馬車が、目の前の地面に乗った。すぐそばに降りたのに、ちょっとも揺れないわ。素晴らしい御者ぶりだわね。

「失礼ながら、女王様の招聘です。お乗りください」  
手綱を握った手に力が入ってるのが見てるだけでわかるわ。若いわねえ　でも、そろそろかわいそうかしら？

「はいはい。決まりに従わないなんて言いませんよ。私はただのおばあちゃんなんですから」

ほほほ、っと笑いながら、私は馬車に乗った。久しぶりにふかふかシートのすわり心地を楽しんでいたら、いつのまにか空にうかんではいるわ。女王様もいい魔女に恵まれているわね。でも

\*\*\*\*\*

「マジヨリリカ！よく来てくれました」

マジヨリンさんに連れてこられたのは、謁見の間じゃなくて、女王様の私室の方。立ち上がった女王様の前で、わたしが片膝をついて礼をしたら、

「どうしたのです？顔を上げてください」

しゃがみこみそうになったから、わたしはよいしよ、っと立ち上がって、マジヨリンさんをちらっと見た。

「いえね、この方の顔も立ててあげないといけないかしら、って思ってたのよ」

視線の先で、困った顔が咳払いしているわ。まあ、

このくらいにしてあげましようか。

「久しぶりねえ、マジヨ　　とと。今は名前で呼んじやいけないんだったわね」

ヴェールの下の目がちよつと伏せられてしまったけど、わたしがそのままテーブルのほつに向かうと、向かいの椅子をすすめてくれた。

「ではマジヨリン、先ほど言ったとおりにお願いしますよ」

椅子に腰掛けながらの言葉に、マジヨリンさんが一礼して立ち去っていく。おしごと忙しいのかしらね？

「それにしても、本当によく戻ってくれましたね」

はあ。仰々しい言葉だわね。仰々しすぎて、ちよつと吹き出しそうになっちゃったくらい。

「いいえ、戻ったわけではないのよ。ただ、ちよつと寄っただけ」

「そう　　ですか。あなたならば、魔女界のどこでも歓迎されるでしょうに」

ああ、もう！ 耐え切れなくて、笑っちゃったじゃない。

「もう、口がうまくなつたわねえ。こんなおばあちゃんおだてて、どうするつもり？」

テーブルがなかったら、肩を叩きたかつたくらい。だけど、彼女はやっぱり明るい顔になってくれないわ。

「マジヨリリカ　　正直に言います。マジヨハートから、わたくしの許へも連絡が来ました。どれみちゃんたちのパーティに呼ばれているのだと。」

わたくしは、あなたが羨ましい　　」

しゃべり方が硬くなつたわねえ。わたしは、彼女のハキハキした口調が好きだったのにな。

「だから言ったでしょう？」女王なんて堅苦しいだけよ。って。あなたはホントに意地っ張りなんだから」

女王様はしばらくうつむいて黙っていた。

ここには、わたしたち二人きり。立場を離れてくれれば、きつと、むかしのような軽口が聞ける。そう思っていたのだけ。

「そう　　そうかもしれませんね」

とうとう、わたしにもそういう言葉でしか話せなくなつたのね。仕方ないのだけど、やっぱり、ちよつとさびしいわね。

立場はわかつていても、やっぱり息苦しいわ。なんとかおいとましようとしたところで、マジヨリンさんの声がかかった。

「女王様、ただいま詰めおわかりました」

それを聞いた女王様、よつやく顔をあげてくれたわ。

「ご苦労さま。　　マジヨリリカ、魔女達から色々と届いていますよ。あなたが贈りものを探しているという知らせは、あちこちに広まっていますからね」

あらまあ。ハートも律儀なんだから。ドンやバラにでも頼んだのかしら？　ロクサーヌだと、リードのお菓子と重なっちゃつわね。

「私からは　　差し上げるわけにはいきませんが、これをお貸ししましょう。どんなものでも小さく収めてしまう、王室用の魔法小物入れです」

マジヨリンさんから小箱を受け取って、なんとなく重さを確かめてみる。箱の重さしか感じないわ。これなら、かばんに入れておいても大丈夫ね。

「それでは、今日は失礼しますね。小箱をお返しするときにでも、またお話ししましょう」

そのときには、もつと軽い話ができるといいわね。わたしは、部屋から立ち去りながら、そう心の中だけつぶやいてた。

心の別のところから、無理だという声が響いてくるのだけれど、それでも

\*\*\*\*\*

「ああ、やつとついたわ」

ちよつと寄り道が過ぎたみたいね。MAHO堂のドアを見つけるのに、こんなにかかるなんて。

さて、ドアをあけて、と。アクセサリー屋さんの匂いは、ガラスの匂いね。ああ、また来たんだわ。

「ね、いま奥のドアの音しなかった？」

ずっつと奥から聞こえてくる。あ、これ、どれみちゃんの声だわ。

「ひよっとしてさ　あ、やっぱり」

お店の方に行ったら、ももちゃんとハナちゃんか飛び出してきたわ。

「リリカおばあちゃん、いらっしやい」

ああ、本当にまた来たんだわねえ。ふたりの顔を見て、ようやく実感が湧いてきたわ。

「はい、こんにちは。もつこんばんは、かしらね？　すっかり遅くなってしまったわ」

ふたりに引つ張られながら、テーブルの前へ。みんなの顔を、ひとりひとり確かめてみて　変わってないわね、って思わず考えてしまったわ。あたりまえね。百年経ってるわけじゃないんだから。

「ご招待ありがとう。パーティのお呼ばれなんて、何百年ぶりかしらね。　あ、そうそう。みんなへのプレゼント、先に渡しちゃおうかしらね」

かばんをテーブルに置いて、まずひとつ目。

「ももちゃんには、これね。マジョリードからよ」

「わア。新しいお菓子だね」

「ええ。食べて感想を教えてあげてね」

あら？　最初は喜んでいたのに、なんか複雑な顔してるわ。変ねえ　まあ、次いきましよう。これは、つと。

「こつちはマジョハートから。赤ちゃんを産んだバラのお茶　まあ、青い花もはいつているわねえ。きつと、ハナちゃんのバラよ」

「ハナちゃんの？　うわあ、ありがと！」

ハナちゃんは、にこにこ笑って受け取っているわ。うん、よかった。

「わたしじゃなくて、ハートに言っただけで。きつと喜ぶわ。あとのみんなの分は、ええと」

かばんの中にしまったはずなのに？　やっぱり、急いで出てきちゃったからかしら。

「あれ？　リリカおばあちゃん、これは？」

「どれみちゃんの声に振り向いたら、ああ、別の袋にまぎれちゃったのね。」

「それぞれ。遅れそうになっちゃったから、みんなからのおみやげ、マジヨリンさんに詰めてもらったのよ。」

「って、顔を上げたら、あらら。みんな、ももちゃんと同じ、妙な顔してるわね？」

「えっと、あの」「ひよっとして、今日がなんの日か知らへんのやろか？」「

「なんの曰って、あら？ 今日は何にか特別な日だったかしら？」

「リリカママは、そういうことに疎くてのお。わたしも気付くべきじゃったわい」

「今日は、敬老の日。おばあちゃんに感謝する日なんです」

「なのに、あたしたちにはっかりプレゼントなんて、あらあら。みんなして、そんな顔しないでちょう

だい。わたしがいまどんなに嬉しいか、わからないかしら？」

「なに言ってるの。どれみちゃんたちからのプレゼントなら、ここにあるじゃない」

「かばんの中から、はがきを取り出して見せたけど、みんなきよとん、とした顔。そう、ね。わからないかもしれないわね。」

「MAHO堂に、マジヨリカちゃんやみんながいて、わたしはそこの中にお呼ばれしてもらえるのよ？ こんな幸せな魔女なんてめったにいないわ」

「ハートより、リードより、クロスより、女王様より。そして、モンローと同じくらい、ね。」

「ああ、ハナちゃんが抱きついてきちゃったわ。みんなも、また笑ってくれてる。それじゃ、」

「あとのプレゼントも、あけちゃいませうか」「あとは誰からのプレゼントなの？」

「どれみちゃんに小箱を手渡してあげた。みんなが困んで覗きこんでいるわ。」

「さあ、わたしも聞いてないわ。ハートが声をかけてくれて、集まったものを全部、いくらでも入る小箱に詰めてもらったのだけど」

「なんじゃとお!?!」

まあ、びつくりした。マジヨリカちゃん、お行儀悪いわねえ。なあに、いきなり?

「どれみ、それを開けるな!!」

「え? なんで??」

「なに言ってるんねや? 箱開けな、中身取り出せへんやんか」

「おまえらは、リリカママの人気を知らんからそう言う　ああッ!　いいから早く離れるおツ!!」

「え　うわああ!!!」

ボンッ!!

チリトリに乗って浮いていくマジヨリカちゃんのところへ、ほうきで上がるうとしたそのとたん。大きな音と一緒に、ものすごい勢いでなにか足元を走

り抜けていったわ。

「きゅううう」

「い、いつたい、なんやったんやあ　?」

あらあら、たいへん。どれみちゃんたち、壁の方に押しつけられちゃった。ハナちゃんなんか、頭から埋まっちゃってるわ。

よく見たら、MAHO堂いっぱいプレゼントがあふれてる。お菓子に本にアクセサリー　見ただけで、誰からのものか全部わかるわ。

わたしは心の中で感謝ながら、ハナちゃんを掘り出しはじめた。

ひとりづつ、上の階にひっぱり上げて、と。ふう。

最後にどれみちゃんを降ろしたところには、ひとつわかったことがあるわ。

なるほどね。女王様が最後までしゅん、としてたのは、おしばいだっただってわけ、か。

「　さあて、女王様に小箱お返しするときには、



「ちやぁんとお礼をつけてあげなくっちゃ」

「どれみちゃんたちがこっちを見てるわ。なんだかみんな、げっそりした顔で。」

「やぁねえ。別に、あなたたちをやったりしないわよ。それじゃ、久しぶりにお相手して差し上げましょ。」

「たあつぶり、ね♡」

\*\*\*\*\*

「お見送りご苦労様でした、マジヨリン」

「城に戻った私を、女王様が出迎えてくださった。珍しいことだ。彼女はそれほど大切な方なのだろうか。だが、それにしても」

「女王様、ご命令通り、あの小箱にすべて詰め込んでお渡ししましたが、あれでよろしかったのでしょうか？」

「女王様はちよつと部屋の天井を見上げられてから、」

「それでよいのです。」

「それよりマジヨリン、今後マジヨリリカから届いたものは、城の中へは持ち込まないように。開けるときは、わたくしも立ち会います。いいですね？」

「ヴェールの下笑顔が、少しいじわるくなつたように見えたのは、気のせいだろうか？」

「さあ、どんな手で来るのかしら？うふふ」

「私は何も見てない。そういうことにしておこつてつむ。」

—おわり—

## ちいさななやみ

「ん　　ありゃ？」

暑くも寒くもない、いつもやったらずつと寝てるよ  
うな朝。そやけど、目えさめたら外まだまつ暗やった。

今日はお父ちゃん、朝早うからお仕事やから、あ  
たしは朝遅うてもええんになあ。あたし、そんな几  
帳面やったるか？

まくらの横見たら、ミミが気持ちよさそにまだ寝  
とん。起こすのもかわいそうやし、あたしはそあつ  
と下に降りてった。

顔洗って、ひとりのごはん。なんやしらんけど面  
倒になってもうて、みそ汁ごはんにかけただけ。テ  
レビに映ってるんは天気予報。きのうも晴れ、きよ  
うも晴れ、あしたもきつと晴れ　つまらんあ。

そのまんま、ぼくとしとつたら、なんや変な感

じ。なんやるなあ思てからだ動かしてみたら、むね  
のあたりが痛なつてん。さわつてみるとやっぱり痛  
い。そんな運動なんてしたかいなあ　　？

「ミ!!!」

あいたっ！

あたまの後ろに、げしつ、と痛み。ミミやな。い  
つのまに　　つて、わあ！もうこんな時間や。ゆっ  
くりしすぎてもた。

むねの痛いんはまだおさまつてへん。けど、ヘタ  
に薬飲むもあかなあ、思て、あたしはそのま  
ま学校に歩きはじめたんや。

\*\*\*\*\*

学校行つて、授業受けて、みんなと話して、もう  
すぐ放課後。あゝ、きょうは全然やる気が出えへん  
なあ。むねも朝より痛なつてるし。

妙あにつつ張つて、変やな？そやけど帰つてもま

だお父ちゃんおれへんやろし　しゃあない。ゆき先生に診てもらたらう。

「失礼しま　ありや？」

保健室のとびら開けようとしたら、札がかかった。『きょうはおでかけです。ゆき』やて。

こついうときに限って、おれへんのやなあ。あ、でもカギはかかってへん。たしか、病気の本あったと思つから、ちよつと見てみよか。

うゝ　ゆき先生、あんな風でもやっぱ保健室の先生なんやなあ。えらい難しい本ばつかで、ほんま、頭くらくらくしてまつわ。

ええと、あたしでも読める本、読める本、と

あ、これなんかどうやろ？『家庭の』つちゆうくらしいやから、先生やなくても読めるかもしれへんな。ほんなら、まず目次。へえ、痛いところから病気がかるんや。こら便利やなあ。あたしが痛いんはむね

やから　あ、あった。

きよ、胸骨？むねの骨やな。その後ろが痛いとか狭心症、心筋梗塞症、肺塞栓症。いや、さっき走ってんけど、どきどきしてへんし。いくらなんでも心臓やないやろ。

次は　肺があ？

すゝ　はゝ

んゝ。息おもつきり吸うても苦しくならへん。これでもないんかなあ。

こつちのは　なんや、えらい難しい名前の病気やな。前胸部に始まり、背部から腰部に移動する動いてへんからちゃうな。次は、と

ふう。　こんだけ探してもみつからへん。なんなんやろ？

そう思いながら、ページなん枚かべらつ、とめくつたら、なんや変なこと書いてある。

ええと　しこり？　たしか、体の中にある、硬い

もんのことやったなあ。それがむねん中であつてか。ちよつと痛いんがまんして、んっ あ。しこりあるわ!

それから? 押すと全体的に痛くなる 痛いなあ。  
あとは 皮膚が乾いて、張ってくる。乾いてるし、張ってる ぴったしや。あたしの病気はこれなんか。それで、名前は え!?

ど、どないしょお!?

\*\*\*\*\*

「あゝいこ」  
うあつ!!

いきなり背中から声がかかつて、あたしはぱつと本をかくした。むねに当たって、じんじん痛い。

「ああ、ハナちゃんかあ」

背中から、長い髪がこぼれてきてん。保健室のとびら、閉めといたはずなのに、そばに来るまで気が

つかへんかったわ。

「ここ、保健室だよな。あゝいこがいるなんて、変なかあんじい」

「あ? あゝ。そ、そうかもしれへんなあ」

あはは、って調子よう笑うたら、離れてくれるかなあ、思たら、ハナちゃんいきなりピタッ、と止まった。あたしの目をじつと見つめて、

「あゝいこ、なんか変」

ぶすつ、としたハナちゃんに、なんて応えたらええんか、わからんかった。ああ、なんや、またむね痛なつてきたみたいや。

「変だよ。あゝいこ、なんかあつたでしょ!? ハナちゃんに、言つてごらんさい!」

そない言われてもなあ。ハナちゃんにわかるわけないし、わかっても困るだけやろし ああ、痛いなあ

「あゝいこ!!」  
痛っ!!

「 ああ、もうっつ！ハナちゃんなんか分かる  
わけないやろーもう出てっつてんかっ!!」

「 ああ、はあ あん？なんや、いきなり静か  
なっつたな」

「 そおつと、背中の方を見たら、白い影がだまって  
立っつた。肩落として、ちよつと前かがみになっ  
て、それでも、目だけおおきく開けてん。けど」

「 あ、いこー」  
「 けど、その目えなんも見てへん あたし、いま  
なに言っつたんや!？」

「 ハナちゃん、ばいばい。ね」

「 あたし、ハナちゃんになを !!」

「 ハナちゃんー」

「 自分の声ではつとした。あかん、いままでほおつ、  
となつとつたみたいや。もうハナちゃん、どこにも  
おれへん」

\*\*\*\*\*

「 あいちゃんが先に出ていっつちゃって、はづきちゃん  
と二人の放課後。」

「 なんだか、きょう一日おかしかつたな。なに言っ  
ても、ほけつ、とした答えしか返ってこないの。」

「 おんぶちゃんにも?」

「 あら、わたしのひとりごと、はづきちゃんに聞い  
てたみたい。わたしはうん、つてうなずいて、」

「 どうしたのかな?」

「 考え込んだじゃつたはづきちゃんが、突然あれつ、て  
顔になった。見ている先を目で追ってみると、廊下の  
向こうからハナちゃんが歩いてきてた。だけど  
なんだろつ?うつむいちゃつて。」

「 ハナちゃん?」

「 声かけたのに、気付いてないみたいだわ。そのま  
ま、まっすぐ歩いてくる。わたしは、ハナちゃんの  
目の前に立って、」

「どうしたの、ハナちゃん？」

そう言っても、なにも聞こえてないみたいに歩いてくる。そのまま、わたしにぶつかるまで。

「うぶっ！　あ、おんぶ」

上を向いて、わたしを見た。目のあたりが、なんだか赤くなってるわ。

「さっきから声かけてるのに、なに考えてたの？」

「ハナちゃん、考えてないんだって」

なに？

「ハナちゃん、なにもわからないんだって」

そのまま、しゃがみこんで小さく泣きはじめた。声も出さないで。

「　　ひどい!!」

はつきちゃんが、その背中をなでながら言った。そうよ、ひどいわー!

「だれよ、そんなひどいこと言うの!!」

ハナちゃんは本当の小6じゃないわ。でも、だからってそんな言葉　!!

「　　あいこ」

え？

「あゝいこ」

うそ　そ、そんな

「ハナちゃん、あいこに嫌われちゃった」

そんな、まさか!?

\*\*\*\*\*

どれみちゃんにハナちゃんあずけて、わたしは保健室に来た。みんな、困った顔してたな　当然ね。みんな、信じてるんだもの。あとはわたし。絶対に、最後まで信じるだけよ。

じゃ、ひとつ深呼吸して、と。

「あいちゃん　」

とびつきり、明るい声で呼びかけながら、とびらを開けた。そしたら、

「入るんやない!」

返ってきたのはすごい大声。 だけど

「入るな、言うてるんが聞こえへんのか!!」

だけど、痛い声だわ。 やっぱりそう。 だつたら、

「ここは保健室よ。 誰が入ったって構わないじゃない?」

ちよつとだけ、微笑みながら。 わたしは背中向けたあいちゃんに近づいていった。

「ええから、出てかんかいっ!!」

いっぽ、いっぽ。 確かめながら近づいていく。 あいちゃん、ずつとどなってるけど、一度もこっち向こうとしない。

「ね、どうしたの?」

「なんでもあらへん」

「うそ」

わたしは、両方の肩に手を置いた。 絶対、逃がすもんですか。

「ハナちゃん、おびえてたわ」

ビクッ

いまはわたしより小さく見えるあいちゃんの体、ふるえてる。 かわいそうだけど、でもちよつとだけ、ほつとした。

「やっぱりね。 あいちゃん、ハナちゃんがどんなことしても、イヤな怒りかたしなはずだもの。」

ねえ、なにがあつたの?」

「おんぶちゃんには、関係あらへん」

またそんなこと言つて! もうちよつと、いじめちゃうわよ?」

「ハナちゃん、泣いてたな。 しゃがみこんで、声も出さないうで泣いてるの。 あゝんな姿、今まで見たことないわ」

がばつ、て思いっきり振り向いたあいちゃん、目にいっぱい涙がたまつてた。 覚悟はしてたけど、むねに詰まっちゃう。 いったい、なにが あれ?

机の上に、本が開いてる。 これ見てたんだ。

「それ？」

本を取ろうとしたら、ぱつ、と抱え込んだ。

原因は、これね？

「それ、見せて」

「何すんねやー！」

あいちゃんの手。いつもと違って、全然力がないわ。

「いいから！見せて!!」

本をつかまえて引っぱったら、

「あ、あつっ」

あいちゃんいきなり、むねを抱えてちいさくなった。

「あいちゃん、むね？」

いま、ちよつと本がぶつかっただけじゃない。な

のにこんな痛がるなんて、それに、

「それって、病気の本？」

ちらつと背表紙が見えた本。これ、うちにも、た

しかあるわ。変わった病気のとき、ちよつと読んだ

ことがある。それじゃ、あいちゃんも？

「あいちゃん!!!」

肩を大きくゆすつたら、本が机の上に落ちた。し

おりをはさんだページが開いてる。

そこにあつた病気の名前を見た瞬間、わたしの時  
間が凍った

\*\*\*\*\*

ああ、おんぷちゃんにばれてしもた。最後まで隠  
したかつたんになあ。

むねはまだ痛いけど、その奥の方がもっと痛いわ。

「あいちゃん」

背中から、おんぷちゃんの声。

「お医者さん、行きましょ。」

わたし、結構顔がきくのよ。いいお医者さん、探  
してあげるわ」

いつもと違う、やさしい声。なんや、悲しなあ

「そんなわけいかへん。こんな病気、いい医者なん  
てかかったら、お金ぎょうさんかかる」



そや、お父ちゃんに 迷惑かけられへん

「そんなこと、気にしないで。あいちゃんは、自分の体のことだけ考えてていれはいいの」

「おんぷちゃん ？」

なに言ってるんやろ。気にせんでええ、言ったか  
て あー！

「まさか、お金って」

「うん」

首だけ振り向いたら、にっこり笑てる。 あかん。

「あかん。それは、絶対あかん」

「いつばい、いつばいお仕事して、わたしがあいちゃん、治してあげる」

そんなん、ちやうわ。

「おんぷちゃんのお金は、おんぷちゃんの夢のためのもんやないか。あたしなんかに使つんなんて間違うて」

「あいちゃん!!!」

びくっ、とした。思わず目え閉じてまうくらい、す

ごい大声や。

「あいちゃん、こつち見て」

まだ、体がびくびくしてる。それでも、なんとかそおっと目え開けて あたしは、心臓が止まりそうになった。

「大親友だつて言ってくれたよね？ わたし、あの日のこと、絶対に忘れないわ」

目の前に、こぶし握りしめたおんぷちゃんが立ってた。ほろほろ涙こぼしながら、それでもまっすぐあたしを見つめるおんぷちゃんが、そこにおった。

「あいちゃん、あきらめないで。お願いだから、なんでも言つて。 わたしに、言つてー！」

気がついたら、おんぷちゃん目のえの中に、泣いてるあたしが映ってた。もう、なんも言えへん。

あたしがちよつとだけうなずいたら、おんぷちゃん、涙流したまま笑ってくれた。

「いやつて言つてもつきあうわよ。あいちゃんのこと一緒に、最後までつきあってあげる」

そついいながら、あたしのむねの真ん中に手を当てて　ん？真ん中？

「おんぶちゃん、そこ、ちゃう」

「え？」

「なんや、びつくりした顔して。間違えたんちゃうか？」

「痛いんはむねや。そこやったら、心臓やんか」

「え？え？心臓が悪いんじゃないの??」

「だって、そのしおりはさんだページって」

「しおり？ああ、

「これは、ゆき先生のしおりや。あたしの見てたんは、ここ」

「あたしの病気のページ開いて、おんぶちゃんの顔に押し付けた。」

「おんぶちゃん、しばらくあくじつとしてたけど、だんだん体がふるえてきた。シヨックやろなあ。あたしかて息止まってしもたくらいやから」

うふふ

ん？

あっはははは

「なんや、なんや?? 本頭にのせたまま、思っきり笑うてん。こんなおんぶちゃん、初めて見るわ。」

「もう、あいちゃんつたら♡」

\*\*\*\*\*

「いまの、おんぶちゃんの笑い声だよな？」

「もう入ってもいいのかしら？」

「廊下のほうから、なんやごちゃごちゃ聞こえてくるけど、どうでもええわ。今は背中のおんぶちゃん、なんとかせな！」

「ちよ、ちよいまち！まて言ってるやろー！」

「あの本見てから、いきなりあたしの背中に抱きついてん。そんで、そんでむねを」

「あ、あつっ！ つつっ！ 痛い、痛いて!!」  
痛いところわって、どないすんねや!! ああ、もう痛うて頭ぼろとなつてまうわ。

「おんぷちゃん、どう ええっ!?!」

ああ、どれみちゃんやあ。たあすけてええ

「な、なに? なんであいちちゃんのむね、おんぷちゃんがさわってるの!?!」

入ってきたみんな、入り口で固まつてる。そろそろやるなあ。痛い頭でぼろっと考えてると、

「やっぱり」

つて言つて、やつと手え離した。

ああ、だんだん頭はつきりしてきた。なあに

が『やっぱり』や! どなつたる思て振り向いたら、おんぷちゃんの顔がドアップになった。

「ね、まだ痛い?」

痛いかやて? そんなん痛いに決まつて え?

「あれ? 痛ないわ」

ちよつと張つてんけど、もう痛ない。なんでやる

思て顔上げたら、赤い目のおんぷちゃんが、笑つて指を立てとつた。

「あいちちゃんのむね、大きくなつてるのよ。それに体がついていけなかつて、痛くなつちやつたの」

ちゆうことは、や。病気や、なかつたんか

「あのお 話が見えないんスけど?」

あ? ああ、どれみちゃん、いたんやつたな。

「つまりね、いきなりむねが痛くなつちやつたあいちちゃんが、変な病気だと思ひ込んで落ち込んでたの。

そこに、ちよつど八ナちゃんが来ちやつたから、つ

いどなつちやつた、つてこと」

もうええ。あほや言つて笑うたらええわ。いらん心配して、もう疲れてしもた。

「そついうわけだから、だいじょうぶよ、八ナちゃん」

え? どれみちゃんの後ろから、ひょこつ、て顔出

したん

「それじゃ あいこ、八ナちゃん嫌いじゃ な

い?」

ハナちゃん!! あたしは途端に目えさめた。ハナちゃんの前まですっ飛んでいって、頭下げて、

「ハナちゃん、ごめん! ほんまあたしがあほやった。許してくれへんかもしれんけど、ごめん!」

もうゆかにすりつけても、まだ足りへん。許してくれへんかったら、どないしたら

そない考えてたら、背中になにか当たった。ハナちゃんの手や。

「病氣じゃなかつたんだ。よかつたね」

ハナちゃんが、しゃがんであたしのこと見てる。

「許してくれるんか?」

「うん ハナちゃん、許しちゃう。だからあ お

むねさわらせて♡」

え? えええっ!?

「ハナちゃん、あいこのおむね、さわりたい ねえ

ねえ、いいでしょ。あゝいこ♡」

や、もう、そないはつきり言われても。なんて言うたらええんか

はあ。

「だめよ。まだ痛がつてるんだから」

おんぶちゃんがハナちゃん立たせてくれたんで、あたしもなんとか立ち上がった。はあ、助かったわ。

と、思たら、

「おんぶ、ずっるゝい! ひとりじめ、だめめ!!」

「わたしのは、治療だからいいの」

「じゃあハナちゃんも、ちりょう、する」

「だめえゝっ!」

同じレベルやんか。はあ、まったく。

「なにやってんやるなあ さつきまで、あゝんな

泣きベそかいとったくせに」

ちよつと口からこぼれてもったら、おんぶちゃん、

くるっ、と振り返って、

「なに言ってるの。演技よ、演技。芸能界に何年いると思ってるの?」

んなあ わかってても、そう言われるとなあ。

「あれ？あいちちゃん、むねのとこ、血がついてるよ」  
ちよつと腐ってたら、どれみちゃんが不思議そう  
に言った。血いやて？ あ、ほんまや。でもな  
んでこんな

あ。

ちろつ、と横見たら、おんぶちゃんこつそり離れ  
ようとしている。逃がさへん。ぱつ、とおんぶちゃ  
んの手えつかんだら、

「あいたつー！」  
やつぱじ。

あたしはそのまんま、どれみちゃんの方に向いて、  
「ああ、これな？」

ふう。できるだけ、声軽うせな。な。

「さつきよるけてなあ、おんぶちゃん、ちよつとけ  
がしてもうたんや」

そおつと開いた手のひら、ツメの跡が残ってん。血  
が出るくらい、強う握つとったんやな

「あほやなあ　せやけどこんなん、ツバつけとい  
たらすぐ治るわ」

あたしは、おんぶちゃんが手え引つ込めんうちに、  
ツメの傷あとをペるペるつ、てなめた。

「こころん中で、おおきに、て言いながら。」

—おわり—

## あとがき

6冊目のどれみ本、久しぶりに大人が主役の噺があります。元老院魔女さん好き♡とか言っておきながら、あまり書いていないのと、発行予定が敬老の日ですから、ちょうどいいかな?と思いついて。

以下、ちょっとだけコメントを。

- 『ふるさとのさき』

- 敬老の日記念のリリカおばあちゃん噺。マジョモンローの友達ですし、どうせだから魔女界でもかなりの有名人ということにしてみました。コメディの小道具ですので、設定創作はご容赦を。

- 設定創作といえば、リリカおばあちゃんの友達(故人)の名前。モンローが女優さんですから、その関連でつけました。ジュリーはジュリー・アンドリュースから、サリーはサリー・アン・ハウズからとっています(どういう選択基準かわかります?(^-^;))

名作劇場シリーズという案もあったのですが、マジョハイジとかマジョペリー又はちょっとな~(-\_-;)ということではボツ。マジョアンはありそうですけどね。

- 『ちいさいたみ』

- みんな成長してるんだなあ　ということで(それ以上コメントなんてできません(^-^;;;))。

では最後に、この本を手にした(手にしてしまう方も含めて)すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好” です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピーフリーです。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭  
発行日 2002年9月15日